

真宗研究 第六十二輯 抜刷
平成三十年一月三十日

永観撰 『阿弥陀経要記』 の特徴について

—— 附『阿弥陀経要記』逸文補遺 ——

佐 竹 真 城

永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について

— 附『阿弥陀経要記』逸文補遺 —

本願寺派 佐 竹 真 城

はじめに

平安時代に活躍した永観（一〇三三〜一一一一）は、一般に三論宗の学僧として認識されている。一方で、自ら「念仏宗」と称して⁽¹⁾おり、日本浄土教史上においても、殊に源信（九四二〜一〇一七）から法然（一一三三〜一二一一）へと念仏思想が展開していく上での媒介的立場にあり、鎌倉浄土教の成立背景となった人師の一人と位置づけられている。⁽²⁾

永観の著作は、古来、『浄土依憑経論章疏目録』（以下、『長西録』と略称）によって、①『阿弥陀経要記』一卷、②『往生拾因』一卷、③『地想観文』一卷、④『常途念仏記』一卷、⑤『三時念仏記』一卷、⑥『決定往生行業文』一卷、⑦『往生講式』一卷、⑧『往生極楽讃』一卷、⑨『念仏讃』一卷、⑩『念仏勸進縁起』一卷の十書あったことが知られるが、現存しているのは②『往生拾因』と⑦『往生講式（往生講私記）』の二書のみで、殆どが散逸している。⁽³⁾しかし、散逸文献のなかには、他書に引用される逸文を集成して復元を試みられたものがある。それ

が、小論で扱う『阿弥陀経要記』（以下、『要記』と略称）である。

『要記』は、今日までに、末木文美士博士によって十二の刊本から二十四の逸文（逸文に類するものを含む）が報告された後、新井俊夫氏によって若干の補遺が為されている。⁽⁴⁾しかし、両研究は逸文の蒐集に留まり、内容の検討にまでは及んでいない。

その後、直接に『要記』の逸文補遺を目的としたものではないが、能島覚氏によって、金沢文庫に蔵される『法事讚見聞集』（推定）古写本断簡から数文補填できることが指摘された。⁽⁶⁾そして筆者も、金沢文庫所蔵の長西（一八四〜一二六六）撰『法事讚疑芥』や、長西門弟の入阿空寂（一二世紀後半〜一三世紀前半）撰『法事讚要略記』が、『要記』の逸文を多く有することに気がついた。

そこで、末木博士と新井氏の逸文集成（以下、「先行逸文」と称す）に、能島氏の指摘する数文と『法事讚疑芥』等の写本に見られる逸文、さらには「先行逸文」で見落とされた諸刊本の文を加えて整理した結果、「先行逸文」の段階に比して、およそ倍となる逸文を蒐集することができた。

小論は、蒐集した諸文から窺える『要記』の特徴の一端を報告するものである。

一 『阿弥陀経要記』の概要

まず、『要記』の概要について判明していることを整理しておきたい。

三善為康（一〇四九〜一一三九）の『拾遺往生伝』には、

阿弥陀経要記、往生捨因、各一卷ヲテ自ラテ以テ筆削ス。念仏之輩皆以競写、以テ為ス念仏宗ト云々。

（『仏全』巻一〇七・八六頁上下、傍線・訓点は筆者加筆）

とあり、『要記』は撰述されて以来、同じく永観撰述になる『往生拾因』とともに、念仏を實踐する多くの人に書写されたことが知られる。三善為康は永観と同時代に生きた人物であるから、この伝承は信頼に値すると考えて大過なく、相当数の書写が行われたことは想像に難くない。にもかかわらず、今日に伝わらないのは不思議かつ遺憾である。

撰述時期について、『往生拾因』の中で、「具如要記」と述べて具体的な説示を『要記』に譲っていることから、その下限は『往生拾因』が撰述された康和五（一一〇三）年以前と考えられている。

『要記』の全容は未だ詳らかでないが、『長西録』には、

同経『阿弥陀経』要記一卷^{卅三丁}

（『仏全』巻一・三四四頁上、「」内・傍線は筆者加筆）

とあり、三十三丁の一巻本であったことが知られる。およその分量を算出するならば、『長西録』では『要記』の直前に源信撰『阿弥陀経略記』を「二十五丁」と伝えていることが参考となる。すなわち、『大正蔵』巻五十七所収の『阿弥陀経略記』は約一万四〇〇〇字であるから、『要記』は約一万九〇〇〇字を有する一書であったと推測できる。もちろん、版型などの条件が全く同一とも限らないため、多少の誤差は想定されるものの、強ち見当外れな数字でもないだろう。なお、「先行逸文」は約二五〇〇字であったが、「新出逸文」を加えることで六〇〇〇字を超えるところまで復元できた。前の数字から考えれば、全体のおよそ三分の一から四分の一にあたる分量となり、概略その内容を把握できるようになったといえる。

散逸時期について、末木博士は、

L「法海撰『阿弥陀経丁亥録』」に「永観ノ要記トイフ書アリテ今ハ伝ハラザルナリ」とあり（二一八頁。な

お、Lにおける『要記』の引用はI「惠空撰『阿弥陀経義要』」からの孫引き）、Lの著わされた文政十年（一八二七）には散逸していたことが知られる。他方、Iには他書に見られない逸文が幾つかあり、直接実物を見

表1 大谷旭雄氏整理

『要記』引用経論と回数

引用経論名	引用数
『平等覺経』	一
『称讚浄土経』	五
『遺教経』	一
『悲華経』	一
『菩薩処胎経』	一
『撰大乘論』	一
僧肇撰『注維摩経』	一
伝智顛撰『阿弥陀経義記』	二
吉蔵撰『法華義疏』	二
懷感撰『群疑論』	二
元曉撰『阿弥陀経疏』	?
源信撰『阿弥陀経略記』	四
智光撰『無量寿経論釈』	一

ていたと思われる。Iの刊行は宝永八年（一七一）であるから、その頃から文政までの間に失われたと考えられる。

（末木博士前掲稿三五〇頁、「」内・傍線は筆者加筆）

と、宝永八年から文政十年までのおよそ一〇年の間に散逸したとの見解を示されている。

内容について、「先行逸文」時点の研究で明らかにされているのは、①引用経論の概要と、②『大経』・『観経』における一念・十念の説示を、与奪義を用いて理解する点が挙げられる。殊に①について、先行研究で明らかにされた『要記』の引用経論は表1の如く纏めることができ、これらの引用経論から窺える特筆すべき点として、①羅什訳『阿弥陀経』の異訳である玄装訳『称讚浄土経』を多く引用して対照しながら意味を的確に取るうとしている点と、②吉蔵（五四九〜六二三）などの三論系典籍が引用されることより三論系浄土教者としての教学的基盤を看取できる点という、二つの特徴が指摘されている。

二 「新出逸文」から先行研究に対して言及できること

前項にて、先行研究で明らかにされている『要記』の概要を確認した。本項では、「新出逸文」の検出により判明した点をもって、先行研究を再検討したい。

永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について

(一) 散逸時期

「新出逸文」を見ると、末木博士の指摘する『阿弥陀経義要』（以下、『義要』と略称）のみが有する逸文はなくなった。さらに対校結果（小論の附録を参照）を見ると、『義要』における『要記』引文は、概ね堯慧（一三九五）撰『阿弥陀経私集抄』（以下、『私集抄』と略称）と符合することがわかった。この結果を勘案すると、『私集抄』と重複しない逸文についても、必ずしも今回蒐集した文献を参照していたとは限らないものの、当時恵空の手元に置かれていた何れかの典籍に引用されたものを孫引きしている可能性は高いだろう。よって、散逸時期の上限はさらに早い段階を想定できるというのが筆者の見解である。なお、金沢文庫には『法事讀下管見鈔』⁽¹⁾なる二巻本の古写本が蔵されているが、筆者が一瞥したところでは、『要記』の引用は一度もない。本書の撰述年は不明であるが、撰者は長西の孫弟子にあたる導空（一三二三）とされ、導空の師にあたる道教（一二〇九―一二八七）撰述と推定される『法事讀見聞集』には『要記』が引用されている点に鑑みれば、孫引きすらない点は疑問である。この点から、『要記』は一二三〇年代の鎌倉浄光明寺周辺では、すでに散逸していたと推測することもできる。現状で明確な年時を示すことはできないが、上記の事実は『要記』の散逸時期を考える上で、一つの可能性を示唆するものと見ることができよう。

(二) 引用経論

「新出逸文」を踏まえると、『要記』所引の経論と回数を表2の如く纏めることができる。⁽²⁾ 筆者が確認した結果と先行研究を対比すると、当然ながら引用回数や所引経論に相異のあることがわかる。それらの相異のなか、回数が減った、あるいは確認できなかつた経論については、数え方の相異、もしくは実際には引文中の引文であるのを永

表2 筆者整理『要記』引用経論と回数

引用経論名	実引用数(想定数)
『無量寿経』	三
『大阿弥陀経』	一
『平等覚経』	一
『称讚浄土経』	九
『涅槃経』	一
『遺教経』	一
『悲華経』	一
『菩薩処胎経』	一
『浄土論』	三
『大智度論』	一
『撰大乘論』	一
天台『阿弥陀経義記』	二
吉蔵撰『法華義疏』	四
吉蔵撰『法華玄論』	一
吉蔵撰『金剛般若疏』	二
吉蔵撰『勝鬘宝幄』	一
慈恩撰『阿弥陀経通賛疏』	一
慈恩撰『阿弥陀経疏』	(一)
懷感撰『群疑論』	(一)
普光撰『俱舍論記』	二
智円撰『西明疏』	一
智光撰『無量寿経論釈』	一
源信撰『阿弥陀経略記』	(一)

永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について

観が直接引用したものと誤解したことによると推察する。また、先行研究にて特徴と指摘された『称讚浄土経』や吉蔵著作の引用が多い点については、前者が九回、後者も四書計八回と、更に多くの引用を確認することができ、前の①②の両見解を補強する結果となった。

三 「新出逸文」に見る『要記』の特徴(一)

——菩提心理解——

これより以下は、「新出逸文」を通して、従来知られていなかった『要記』の特徴の一端を見ていきたい。

永観は『往生講式』において、冒頭の第一門に「発菩提心門」を立てていることから、菩提心を発すことを重要視していたと考えられており、その『往生講式』に示される菩提心とは、「願生心」あるいは「厭離心」と定義される⁽¹⁴⁾。また、『往生拾因』にも菩提心理解が述べられているが、『往生拾因』では密教の観法の影響を受けた「衆生本有の浄菩提心」と定義されており、著作間でニュアンスの相異はあるものの、永観の菩提心理解は、概略上記の如く知られている。

そして、「新出逸文」にも菩提心に関する言及を確認できる。それは次の如くである。⁽¹⁶⁾

是故要記云、実雖大菩提心浄土正因、末代遇夫輒以難発。縦雖希発、遇縁使退。故仏願説浄土莊嚴、令彼願樂、生大乘土發菩提心。若不爾者、何得発心。豈不如来大悲願力、斯実発心之方便、末代之要行也。

(B)下21右、傍線・訓点は筆者加筆)

ここで注目すべきは、「末代の愚夫は簡単に菩提心を発すことができない。もし希に発せる人がいたとしても、縁によつては退失してしまふ」との説示と、「それを見越して仏は誓願に浄土の莊嚴を説き示して往生を願わせ、大乘の土たる浄土に往生して菩提心を発させる。そうでなければ、どうして菩提心を発すことができるだろうか」との理解が示される点である。すなわち、末世の衆生では菩提心を発せず、穢土において発すのはあくまで浄土願生の心であるとし、浄土往生によつて環境が調うことで、菩提心を発すことができると示しているのである。これですでに説明されている永観の他著作における理解とは異なるものであり、永観思想の新たな一面が窺えよう。

そして、如上の菩提心理解からは、法然との接点が見えてくる。すなわち『逆修説法』において、
今浄土宗菩提心者、先往生浄土、欲度一切衆生、断一切煩惱、悟一切法門、証無上菩提之心也。

(『昭法全』二四〇頁、傍線・訓点は筆者加筆)

と示される「浄土宗の菩提心」に通じる点を看取できよう。法然の菩提心理解は、同じく『逆修説法』において、
善導御意、先生浄土満菩薩大悲願行之後、還入生死欲遍度衆生、此心名菩提心云々。

(『昭法全』二四二頁、傍線・訓点は筆者加筆)

と述べているから、善導(六一三〜六八一)の説示に基づくものと考えられる。その善導義とは、「散善義」上品下生釈に、

唯發一念厭苦、樂生諸仏境界、速満菩薩大悲願行、還入生死、普度衆生。故名發菩提心也。

と示されるものである。

周知のように、永観は早い段階で善導「散善義」を受容⁽¹⁷⁾して称名念仏を勧め、念仏思想において法然への影響という点でも注目される人師であるが、「新出逸文」⁽¹⁸⁾の検出により、菩提心理解においても善導の説示にいち早く注目し、善導と法然の間に媒介的役割を果たした可能性を考へることができよう。⁽¹⁹⁾

四 「新出逸文」に見る『要記』の特徴(二)——吉蔵の影響——

『要記』は三論系諸師の著作、ひいては吉蔵の著作が多く引用されることはすでに述べたが、文献名を示して直接に引用の形態を取らない文言であつても、吉蔵著作の影響下に執筆されていることが明らかとなった。それは以下に対照した如くである(傍線・ゴシック処理は、便宜上筆者が加えた)。

(1) 『要記』⑧

観云、内秘菩薩外現声聞位高可崇故呼為長老也又云撰大乘論明身子是化^上

(A二11左)

吉蔵撰『金剛般若疏』

又云空生即從生時受称其人内秘菩薩行外現声聞位高可崇故呼為長老也

〔大正蔵〕卷三三・一〇〇頁上

或有經云此是化人撰大乘論明身子是化人善吉猶為其例

〔大正蔵〕卷三三・一〇〇頁上

(2) 『要記』⑨

観、羅睺羅者此云覆障三蔵云本是阿修羅名若具翻之応云障月仏子又云宮生^{略文抄}

(A二18右)

吉蔵撰『法華義疏』

羅睺羅者此云覆障以六年在胎為胎所障故云覆障三蔵云本是阿修羅名此阿修羅能以手障月若具翻之応云障月仏

永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について

(3) 『要記』⑩

觀云、賓頭盧頗羅墮者性頗羅墮俗也真諦三藏云翻為利根仙人六性波羅門中一性也上 (A)二19右20左

(4) 『要記』⑪

觀云、迦留陀夷者迦留此翻時陀夷名之為起十八部疏云迦留者累陀夷者上謂悉達太子宮時師也文 (A)二20左

(5) 『要記』⑫

觀云、阿菟樓駄者此翻為如意亦云无貧西明疏亦加二人謂捺阿迦与難達羅難□阿也文 (A)二22右左

(6) 『要記』⑬

觀云、以衆生常有諸苦是故大士恒順濟拔故言常精進文 (A)二24右

子所以作此名者是借喻為目仏自說我正法如月此兒障月欲出家學道有兒則成障也雖復是障而如來能捨之仏自說過去世羅睺羅數為道作障我亦數能捨之又名宮生

〔大正藏〕卷三四・四六〇頁中(下)

吉藏撰『法華義疏』

初明道名俗姓同也日月灯明道名也姓頗羅墮俗姓也真諦三藏云翻為利根仙人六性波羅門中一性也又翻為弁才又翻為滿滿正也 (〔大正藏〕卷三四・四七九頁下)

吉藏撰『法華義疏』

迦留陀夷者迦留此翻時陀夷名之為起十八部疏云迦留者累陀夷者上謂悉達太子在宮時師也

〔大正藏〕卷三四・五八〇頁中

吉藏撰『法華義疏』

阿菟樓駄者翻為如意亦云无貧以過去一食施辟支仏十五劫中天上人中受於福樂最後得羅漢常得如意無有貧窮是甘露飯王之子也 (〔大正藏〕卷三四・四五九頁下)

吉藏撰『法華義疏』

常精進者以衆生常有諸苦是故大士恒須濟拔故言常精進也 (〔大正藏〕卷三四・四六三頁中)

(1)では、序文の「長老」を釈するにあたり、吉蔵撰『金剛般若疏』の所説に依拠していることがわかる。(2)では、仏弟子の「羅睺羅」を釈するにあたり、吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることは明白である。ただし、永観自身「略抄」と記していることから、本来は書名を挙げて引用したものと考えるべきかもしれない。(3)では、仏弟子の「賓頭盧頗羅墮」を釈するにあたり、引文も含めた主要部分をほぼ吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。「性」⇨「姓」の相異については、音・意味ともに同じもので相互に用いられるものであるから、相異と見なக்கும்大過ないだろう。(4)では、仏弟子の「迦留陀夷」を釈するにあたり、吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。「累」⇨「黒」の相異については、音・意味は全く異なるものの、くずした字体は相似するところがあり、写伝過程での写誤と見て大過ないと考える。(5)では、仏弟子の「阿菟樓駄」を釈するにあたり、後半は智円撰『西明疏』からの引用であるが、前半を吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。相異箇所である「菟」⇨「菟」については、異体字関係あるいは写誤と見ることができ、実質は全文一致といえよう。(6)では、「常精進菩薩」を釈するにあたり、吉蔵撰『法華義疏』に依拠していることがわかる。相異箇所については、対校本では完全一致しており、今回底本に採用した典籍の写誤および単純省略と考えられる。如上、『要記』では特に基礎的・通仏教的な部分において、吉蔵著作の影響下に論じられていることを指摘できる。書名を挙げて引用する例も合わせると、『要記』の撰述にあたっては、吉蔵教学に比重が置かれていたことが知られるのである。

①ところで近年、舎奈田博士によって、永観を東大寺において真言と顕教を兼学していた真言宗僧侶と位置づける見解が提示されている。⁽²⁰⁾その論拠とされるのが、次の四点である。

- ①生涯や関連する寺院・人師に真言宗、真言僧の影響が強い
- ②念仏行のみならず密教的な修行を行っていた